閉校の辞

ご来賓の方々をはじめ、本校と関わりの深い多くの皆様の御臨席をえて、熊本県立多良木高等学校閉校式を挙行いたしますことは万感胸に迫るものがあります。

時を遡ること一世紀近くの大正十一年、多良木実科高等女学校が創立されました。「上球磨にも女学校を」との地元の熱意で当時の多良木村ほか八か村による組合立で発足しました。この組合立の小さな女学校時代に「平和・勤労・進取」の校訓と、その校訓をもとにした校歌が定められました。昭和六年に県立の高等女学校へと管轄が移った後も、校訓と校歌は変わることなく、世代を超えて受け継がれ、今日に至ってお

ります。この校訓と校歌こそ、本校の精神と言えます。

昭和前期は激動の時代で、学校も戦時体制に巻き込まれました。殊に太平洋戦争の期間、最上級の四年生は学校を離れ熊本市の軍需工場へ学徒勤労動員で赴き、過酷な日々を送ったと伝えられています。

戦後の混乱期を経て、学制改革によって男女共学の新制高校に生まれ変わり、昭和二十六年、熊本県立多良木高等学校として再出発します。その後、高校進学率が上昇し生徒数が増加するに伴い、教育環境の拡充のために校地移転の気運が高まります。そして昭和四十三年、多良木町上迫田から

現在地に移転します。多くの地権者の方のご協力により広大な校地が誕生したのです。

昭和四十七年度は生徒数千百五十人を数え、本校史上最大の規模を誇りました。同年には水上分校も開校しています。充実した施設と大勢の生徒のみなぎるエネルギーを力に、昭和四十年代後半から陸上部のオレンジ旋風、女子剣道部の全国優勝、野球部の躍進など体育系部活動が相次いで輝かしい成果をあげ、地元は湧きました。

その後、人吉球磨地域の急速な少子化に伴い生徒数が減少していきます。水上分校は平成二年に閉校。しかしながら、平成三年に体育コース、平成六年には福祉教養コースを設け、特色ある学校づくりを進めま

す。小規模でも地域社会にとって大きな役割を担う学校であり、勉学、部活動、ボランティアと高校生の元気を発信し続けました。

欧米では教会を中心にコミュニティが形成されますが、わが国では明治以来、学校が町の中心にあると言われます。「学校と共に」という地域の皆さんの思いが反映されているのでしょう。多良木高校はまさに上球磨の人々の拠り所として、九十七年の間、地域と共にあったと思います。

きょうこの会場に最後の学年六十七人の生徒達が出席しています。彼らは、先輩方がつないできた襷を受け、言わば最終走者、アンカーとしてこの三年間走ってきました。

閉校する学校とわかっていながら、それでも本校を選んだ志の高い生徒達です。アンカーの役目を立派に果たしたことを皆様にお伝えいたします。

この場所は一万九千人余りの若人たちの青春の故郷です。願わくは、いつの日か再び学び舎として蘇らんことを切に祈り、閉校の辞といたします。

平成三十一年三月二日

熊本県立多良木高等学校

第二十七代校長　粟谷雅之